QA³RC Kyushu University Advanced Asian Archaeological Research Center
NEWSLETTER No. 5 2015. Apr.
九州大学アジア埋蔵文化財研究センター　ニュースレター

新センター長挨拶

アジア埋蔵文化財研究センター長
比較社会文化研究院　小山内 康人

九州大学「アジア埋蔵文化財研究センター」が発足して2年が経った。本センターでは、発足当初から、九州大学に蓄積された考古学をはじめとする埋蔵文化財に関する諸分野の研究成果と資源を結集し、「アジアにおける埋蔵文化財先端研究拠点」を目指して研究を推進してきた。この間、他に類例のない統合的学際（文理融合）研究を飛躍的に進展させ、多数の斬新な先進的研究成果を挙げることにより、学外からもアジアの研究拠点施設として認知されるようになってきた。3年目を迎える今、埋蔵文化財に関する分析技術の開発と社会連携事業等を強化しつつ、学内他部局および国内外の関連研究機関との連携を一層確固たるものにして、アジアにおける埋蔵文化財研究の「国際研究拠点」として機能すべき時期にきていると感じる。平成27年4月からセンター長をお引き受けするにあたり、本センターがアジアにおける埋蔵文化財国際研究拠点の嚆矢となるべく、邁進したいと思う。関係の皆様のご協力をお願いいたします。

アジア埋蔵文化財研究センターと土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの共同研究が始動

アジア埋蔵文化財研究センター　高椋 浩史

本州西端の響灘に面する地域には多くの弥生時代の埋葬跡が分布しており、そこから多くの弥生時代人骨が出土しています。その中でも下関市豊北町に所在する土井ヶ浜遺跡は、保存状態の良好な弥生時代人骨が約300体出土した遺跡として全国的にも有名な遺跡です。土井ヶ浜遺跡と九州大学における古人骨研究のつながりは強く、土井ヶ浜遺跡の初期の発掘調査を指揮したのは、当時九州大学医学部解剖学第２講座の金関丈夫教授でした。金関教授は土井ヶ浜遺跡をはじめとして自らが収集した弥生時代人骨の形態研究から、弥生人の形質が大陸からのヒトの渡来によって形成されたとする「渡来・混血説」を提唱し、現在では日本人の形成史における定説の一つとなっています。それに加えて、土井ヶ浜遺跡から出土した古人骨資料は人類学のみならず、考古学分野での社会組織研究にも用いられ、日本考古学における弥生時代の社会組織に関する論理的な枠組みの構築に大きく寄与してきました。中でも、アジア埋蔵文化財研究センター前センター長の田中良之先生の歯冠計測による血縁関係の推定方法に基づく一連の研究によって、土井ヶ浜遺跡の社会は双系的な社会であったことがわかっています。

このような研究成果をさらに発展させるため、アジア埋蔵文化財研究センターと土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムは、2015年1月22日に古人骨資料の研究連携・協力に関する覚書を調印しました。今後は、高精度の分析機器を用いた人骨歯牙エナメル質のSr同位体比分析によって婚姻による移動や通婚圏について検討し、土井ヶ浜遺跡の社会組織研究をさらに発展させていきたいと考えています。また、土井ヶ浜遺跡以外にも響灘沿岸地域には弥生時代の墓地遺跡が数多く分布しており、それらの墓地から出土した古人骨資料についても同様の分析をおこなうことで、響灘沿岸地域全体での通婚圏の把握が可能となります。そうして得られたヒトの移動や通婚圏に関する知見と、考古資料に基づくこれまでの研究成果と総合することで、響灘沿岸地域の社会構造の特徴をより鮮明なものへと深化させ、この地域の弥生時代における社会の実相を解明していきたいと考えています。

写真. 研究連携・協力に関する覚書調印式の様子.

センター特別講演会報告

歴史情報研究部門
人文科学研究院　宮本 一夫

中国社会科学院考古研究所副所長白雲翔先生を招聘して、2014年12月５日に第2回九州大学アジア埋蔵文化財センター特別講演会を開催した。白雲翔先生は、『先秦両漢鉄器的考古学研究』（2005年、科学出版社）という著書でも知られるような中国きっての鉄器研究の専門家であり、この方面の第一人者でいらっしゃる。この度の講演は「古代中国の鉄文化」というタイトルで、中国における最近の鉄器研究の動向をまとめたものである。近年中国では鉄に関する新発見が多く、まずそれらを紹介されながら、中国の冶鉄の起源を考察された。それによれば、新疆地区と中原地区は別々に冶鉄が起源したとして、新疆地区はユーラシア草原地帯との関係から、中原地区は独自な起源論を展開された。

（次ページへ続く）

また、初期の鉄器は塊錬鉄からなるが、塊錬鉄技術の諸問題とともに、中国で開発された鋳鉄技術の諸問題も議論されている。そして鋳鉄技術の発達と漢代における冶鉄生産の実体について、最近の発掘調査の成果からまとめられた。九州大学アジア埋蔵文化財センターでも鉄ないし鉄器についての科学的分析を試みようとしているが、今後の中国との国際共同研究の足がかりとなる講演会であった。

続いて2015年1月23日に第3回九州大学アジア埋蔵文化センター特別講演会を開催した。新潟大学現代社会文化研究科白石典之教授を招聘して開催した。白石教授はモンゴル考古学研究の大家であり、その中でもモンゴル時代の考古学がご専門である。長年、モンゴル帝国の副都であるアウラガの発掘調査を行ってこられている。また白石教授には、九州大学考古学研究室が行っているモンゴル青銅器時代板石墓の発掘調査にあたって、様々な援助をいただいている。今回、白石教授はモンゴル帝国の首都であるカラコルムの都市復原を行われ、「モンゴル帝国カラコルム「万安宮」の所在と企画」と題して発表された。1235年にオゴタイによってカラコルムに「万安宮」が建設されているが、それが実際の遺構のどれにあたるかが長年の議論となっていた。白石教授はソ連のキセリョフ調査隊の成果を追認しながら、「万安宮」を「興元閣」に改築したと考え、近年発見されたエルデネ・ゾー僧院の下部囲壁こそが、「万安宮」にあたるとされた。

写真左. 白雲翔先生によるご講演「古代中国の鉄文化」（第2回センター特別講演会）.
写真右. 白石典之先生によるご講演「モンゴル帝国カラコルム「万安宮」の所在と企画」（第3回センター特別講演会）

人骨の形態から身体活動を探る

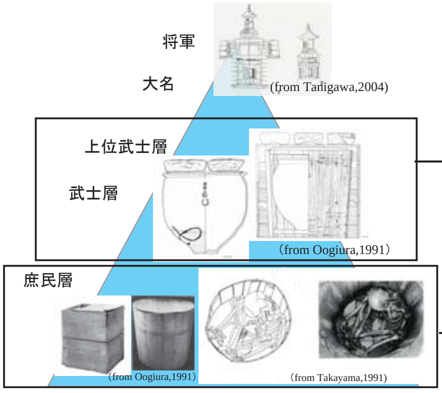
文化財調査法開発部門
総合研究博物館　米元 史織

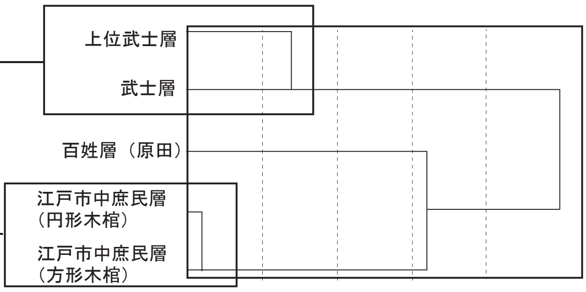
人骨の形態は可塑的なものであり個体の生涯を通して適応的に変化していく。後天的な要因によって人骨形態が変化しうることから、ある特異な職業や生業、生活習慣の集団・個人と、そこにみられる病変や特異な形態変異を関連付けて説明する研究は数多く行われてきた。例えば、日本人にとって身近な例といわれているのが蹲踞面であり、蹲踞の姿勢によって下腿の骨の関節面の形態が変化するということが指摘されている。

このように生活習慣や活動が人骨形態に与える影響に関する研究の１つに筋骨格ストレスマーカー（musculoskeletal stress markers、以下MSMsと略す。場合によってはentheseal changesとも呼ばれる）がある。これは筋使用あるいは筋にかかる負荷が強ければ強いほど、その負荷に適応するために人骨の付着部域はその面積を増やすように変化していくということを前提としている。筋・靭帯・腱付着部の複雑さの程度を基準としたスコアを用いて、各付着部位の発達度の評価を行い、長期継続的な体の使い方を推察しようとするものである。このような骨の特質を利用して、過去の人々の身体活動から、生業や生活様式を探ることが可能となる。

例えば江戸時代の江戸市中に埋葬された人骨を対象とした研究が挙げられる。江戸市中に関しては、埋葬様式と身分・階層の対応関係が考古学的な研究から確認されていた（図左）。そこで四肢骨29部位のMSMsを評価しクラスター分析によって埋葬様式群間の活動の相違を検討した（図右）。その結果、身分とMSMsに相関がみられ、武士階層は互いに類似し、他の庶民層とは異なるという傾向が得られた。武士の特徴は下肢8部位に認められ、歩行様式など起居進退の動作法、武術や馬術によって発達しうる部位と矛盾なく、武士特有の生活様式によって形成された可能性が示唆された。

このような検討を縄文時代から近世まで通史的に検討していくことで、身体活動の差が階層・地域・男女・年齢などの違いによってどのようにあらわれるのかということを明らかにするために調査を進めている。





図左. 江戸市中における埋葬様式と対応する階層（谷川, 2004をもとに作成）．図右. MSMs29部位を用いたクラスター分析の結果.

【センター活動報告】

2015年1月23日　アジア埋蔵文化財研究センター第3回特別講演会
講演題目：「モンゴル帝国カラコルム「万安宮」の所在と規格」
講演者：白石典之教授（新潟大学）

2015年3月16日　アジア埋蔵文化財研究センター第5回研究会
講演題目1：「出土資料からみる秦漢時代の国家支配」
講演者1：植松慎悟(人文科学研究院)

講演題目2：「地球科学的胎土分析による牛頸産須恵器の生産様態の解明」
講演者2：石田智子・足立達朗・中野伸彦・小山内康人・田中良之(比較社会文化研究院)

2015年4月16日　アジア埋蔵文化財研究センター第6回研究会
講演題目1：「考古地磁気と被熱遺構の年代推定について」
講演者1：北原優(地球社会統合科学府)

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター ニュースレターNo. 5
発　行：〒819-0395　福岡市西区元岡744
九州大学アジア埋蔵文化財研究センター
編集：足立 達朗　発行日：2015年4月30日
TEL：092-802-5661/FAX：092-802-5662 E-mail：qa3rc@scs.kyushu-u.ac.jp
ホームページ　http://scs.kyushu-u.ac.jp/qa3rc/